



特集

アカウントビリティ研究の理論と実証

特集にあたって

本企画は、日本政治学会 2005 年大会分科会「アカウントビリティ研究の理論と実証」において報告された 3 つの論文と 2 名による討論を加筆修正してまとめたものである。

- | | |
|------|--|
| 論文 1 | 福田耕治「EU におけるアカウントビリティ——NPM による欧州ガバナンス改革とエージェンシーを事例として——」 |
| 論文 2 | 山岡龍一「政治におけるアカウントビリティ——代表、責任、熟議デモクラシー——」 |
| 論文 3 | 白鳥浩「アカウントビリティの諸相：現代政治学における民主主義論から——2005 年郵政解散選挙を視野に——」 |
| 討論 1 | 森政稔「アカウントビリティにおける理論と実証——コメント——」 |
| 討論 2 | 大黒太郎「政治過程論はなぜ「アカウントビリティ」に関心をもつのか？——3 論文へのコメント——」 |

3 つの論文は、近年、政治学で活発に議論されているアカウントビリティという古くて新しい概念を、国際行政学、政治理論、比較政治学の各分野できわめて今日的な視点から検討している。まず、福田論文では、もっとも先進的なデモクラシーを実践しているといわれる欧州において、EU という超国家レベルで「アカウントビリティの欠落」や「デモクラシーの欠落」がみられ、エージェンシー化によってその克服が試みられているが、依然として解決には至っていない点が指摘されている。山岡論文では、アカウントビリティのある政治が、責任ある統治のより民主政的なバージョンとして捉えられており、さらに、熟議デモクラシーとアカウントビリティの意味が探られている。一方、白鳥論文は、2005 年の衆議院議員選挙を分析することによってアカウントビリティ論の弱点を示し、クリーヴィッジ論的視点の相対的重要性を示唆している。これら 3 つの論文で共通するのは、現在、政治のコンテキストにおいて、アカウントビリティはいかに定義されるべきかを、それぞれの分野で綿密に考察している点である。

2 つの討論は、政治理論と比較政治学の立場からなされている。まず、森討論では、アカウントビリティという古くから存在してきた概念がなぜ最近になってこれほど盛んに議論されるようになってきているのか、という興味深い問題提起がみられる。背景として新自由主義の席捲にともなう民主主義の赤字の問題が示唆されている。アカウントビリティ論における選挙的次元の重要性を重視する大黒討論においては、社会の実質的な不平等や不公正を是正する可能性を内包するものとしてアカウントビリティ概念が捉えられており、政治過程論においてそれを研究する意味が検討されている。

このように本企画は、政治学の異なった分野を交差してアカウントビリティをさまざまな角度から考察するという新しい試みであると同時に、日本におけるアカウントビリティ研究の先陣を切るものとして位置づけられるだろう。

(真柄秀子)